

唯識の体系

—— 研究のための一つの戦略 ——

湯 田 豊

(a) 仏教思想のオリエンテーリング

わたくしの専門は思想史である。わたくしの主要な研究領域は、ヨーロッパおよびインドの思想である。インド思想史に関して言えば、古代インドのヴェーダとウパニシャッドおよびヴェーダーンタを始めとする中世インドの『六派哲学』が、わたくしの一つのレパートリーである。わたくしのレパートリーの中に、わたくしは仏教を加えることにした。仏教を思想的に概観すれば、恐らく、ブツダの基本的な思想、テーラヴァーダ、部派仏教、および大乘仏教哲学の四つに仏教思想を分けていいであろう。ただし、これらはすべてインドの仏教のカテゴリーに組み入れられる。中国仏教および日本仏教は、わたくしの管轄外である。少なくとも、現在のところ、中国および日本の仏教の研究は、わたくし自身のスケジュールには含まれていない。インド仏教の研究が、わたくしのテーマの一

つである。

ブツダの基本的な教えについて言えば、わたくしは、最近、出版した著書『ブツダvs.ニーチェ』(大東出版社、二〇〇一年)において、ブツダの教えを詳しく論じた。四つの貴い真理、縁起(相関関係の理論)、非自己、カルマンの法則、および涅槃などについて、わたくしはニーチェとの比較を通じて論究した。ブツダの教えはパーリ語で記録されている。それゆえに、わたくしはパーリ語の原典の解説を通じてブツダの教えを理解しようと努力した。『ガルマン』という語は古代インド語(サンスクリット)であり、パーリ語では『ガンマ』と言われる。『ブツダvs.ニーチェ』において、わたくしは網羅的にブツダの教えを扱ったが、ある重要なテーマに言及しなかった。ある重要なテーマとは何か?—それは仏教の瞑想である。仏教のメディテーションを、わたくしは『ブツダvs.ニーチェ』において扱わなかった。ブツダの基本的な教えとの関連で発言すれば、アビダルマ [Abhidhamma, パーリ語の *Abhidhamma*] を理解することなく、テーラヴァーダを理解することは不可能である。ブツダの教え、および部派仏教の中間に置かれているのが、いわゆる『アビダルマ仏教』である。わたくしが初期仏教の瞑想について論じなかったのは、アビダルマにおけるメディテーションについて、わたくしは研究していなかったからである。アビダルマの研究は、初期仏教および部派仏教との関連においてなされるべきである。

大乘仏教哲学は、中観 [Madhyamaka] ないし空観 [Sunyatavada] の体系、ヨーガーチャラー [Yogacara] ないし唯識 [Vijnānāda] の体系、および密教 [Tantra] の三つに分けられるであろう。唯識の体系と中観の体系が大乗仏教あるいはマハーヤーナ [Mahayana] に属するのに対し、密教はタントラヤーナ [Tantrayāna] に属すると言えよう。わたくしが今後の研究テーマの一つとして選んだのは『唯識の体系』である。しかしながら、わたく

しは『唯識の体系』を専門的に研究しようとするものではない。わたくしは、『唯識の体系』に興味をそそられ、その基本的な思想を説明しようとするだけである。唯識思想はアサンガ〔無著〕とヴァスバンドウ〔世親〕という兄弟によって創始された。わたくしは弟のヴァスバンドウ〔Vasubandhu〕に興味をそそられている。ヴァスバンドウの『唯識』を説明すること——それが、わたくしの目下のテーマの一つである。

ヴァスバンドウの『唯識』を、わたくしは研究しようと思う。しかし、わたくしは若くはない。それに、わたくしはシャンカラの『ブラフマ・スートラの註釈』の全訳をしなければならぬ。ヴェーダの研究も、まだ終わっていない。それに、ニーチェの『ツアラトウストラ』は、このように語った』について、わたくしは解説書も出版しなければならない。人生は短く、わたくしに残された時間は短い。そして時間は川の流れるように流れている。多忙とスピードの時代に生きるわたくしは、ヴァスバンドウ研究のための一つの戦略を考案しなければならない。どうすれば、わたくしはヴァスバンドウの『唯識』の中心思想をストレートに理解し得るであろうか？

(b) ヴァスバンドウは二人いた？

残念ながら、わたくしは『ヴァスバンドウ学者』ではない。けれども、わたくしは彼の唯識の哲学を深い次元において理解したいと思う。わたくしはヴァスバンドウの『唯識』について、書誌学的で、煩瑣な知識を必要としない。彼の唯識思想のハートをサンスクリット原典に基づいて解読しさえすればいい。このようにヴァスバンドウの『唯識』を説明しようという目的が設定された以上、この目的を可能な限り速やかに実現する手段を講じること

が望まれる。わたくしが最初に問題にするのは、ヴァスバンドウは二人いたか否か、ということである。そして、その次に問わねばならないのは、ヴァスバンドウの「唯識」の核心を、われわれはどういうふうに理解すべきか、ということである。そして、第三に、ヴァスバンドウの「唯識の体系」に、われわれがどのようにアプローチするかが問われる。そして、第四に問題になるのは、ヴァスバンドウの「唯識」を知るために不可欠な文献は何か？ということである。

ヴァスバンドウは誰か？ この問いに答えるためには、われわれはドイツ生まれのインド学者、エーリヒ・フラウヴァルナーの『ヴァスバンドウ二人説』を検討すべきであろう。『大法論』第5号（第68巻、平成一三年）の「特集Ⅱ〈唯識〉入門 悟りへの道を説く仏教の心理学」を、たまたま、わたくしは読む機会を得た。この「特集」には、興味深い論文が多数見いだされる。横山紘一「唯識とは何か」、竹村牧男「唯識が見た心と世界 迷いとさどりの分析」、松田和信「唯識の祖師たち 弥勒 無著 世親 安慧 護法 真諦 玄奘 窺基 道昭」、勝呂信静「法華思想と唯識」、岡野守也「心理学と唯識」などの興味深い論文が、この号の『大法論』に含まれている。これらの論文の中で特にわたくしが啓発されたのは、佛教学教授、松田和信氏の「唯識の祖師たち」である。フロイトはユダヤ教の預言者モーセは二人存在したと言った。わたくしは、もちろん、フロイト説を信用しない。同様に、フラウヴァルナー教授のヴァスバンドウ二人説に対して、わたくしは懐疑的である。松田和信教授は「唯識の祖師たち」において、簡明に、しかも正鵠を得た解説をしている。わたくしはヴァスバンドウに深い関心を抱いているので、松田教授のヴァスバンドウに関する解説を何回も読んだ。松田教授の解説の中で、特に、わたくしによってマークされたのは二箇所である。ヴァスバンドウ（世親）は複数いたとする説に触れたあとで、松田教授は次のように

言っている——「……ウイーン大学の故フラウヴァルナーが提唱し、シュミットハウゼンによつて修正された世親二人説は有名である。しかし、現在ではシュミットハウゼン自身は、この説を放棄したと個人的には伺っている」『大法輪』第5号、85頁、第三段」と。「唯識の祖師たち」の終わりのパラグラフにおいて、松田教授は兄の無著と弟の世親を比較し、「……瞑想と弥勒菩薩の啓示の中に生きた兄無著と、兄の言葉を頭脳明晰に分析し、わずか三十の詩節に体系化した弟世親の性格が見て取れるのかもしれない」『大法輪』第5号、86頁、第一段」と述べている。『わずか三十の詩節』という言葉によつて意味されるのは、もちろん、『唯識三十論』である。『唯識三十論』は『唯識三十頌』とも呼ばれる。松田教授は、ヴァスバンドウの唯識を説く作品として、「唯識二十論」と『唯識三十論』を挙げている。

「しかし、現在ではシュミットハウゼン自身は、この説を放棄したと個人的に伺っている」という松田教授の文句から、わたくしは松田教授はハンブルクに留学し、シュミットハウゼンの下で仏教の研究をしたと思ひ込み、松田教授に手紙を書いた。松田教授からのわたくし宛の返信によつて、彼がシュミットハウゼンの弟子ではなく、フェッターの下でライデンで仏教を学んだことを知った。ちなみに、シュミットハウゼン、フェッター、およびシュタインケルナーは、ウイーン大学のフラウヴァルナー教授の門下生であるとの由。さて、わたくし宛の手紙の中に、松田教授はシュミットハウゼンの論文 *Sautāntika-Voraussetzungen in Vimsatikā und Trisika* および、この論文の和訳、『二十論』と『三十論』にみられる経量部的前提」〔加治洋一訳。『佛教学セミナー』第37号、一九八三年五月。大谷大学仏教学会〕を同封してくれたのである。加治教授は松田教授の友人である、と、わたくし宛の彼の私信に書かれていた。シュミットハウゼンのドイツ語の原文を加治教授の和訳によつて読むことが出来、わたくしは非常

に嬉しく思っている。加治訳によって、わたくしは「シュミットハウゼンによって修正された『世親二人説』を知ることが出来た。しかし、シュミットハウゼンのこの論文を読む限り、彼が彼自身の『世親二人説』を確信していたようには思われない。「しかし、現在ではシュミットハウゼン自身は、この説を放棄したと個人的には伺っている」という、松田教授の発言は正しいのではないかと、わたくしには思われる。いずれにせよ、ヴァスバンドウが、単数であったのか、あるいは複数であったのかという問題を、われわれは解決しなければならないであろう。わたくし自身は、ヴァスバンドウ一人説を受け入れてもよいと思っている。ヴァスバンドウ一人説に、わたくしは現在のところ大きく傾いている。ヴァスバンドウが二人存在していたという学説は、フロイトの『モーセ二人説』と同じようにロマンチックな物語である。しかし、『モーセ二人説』と同じように、『ヴァスバンドウ二人説』も、学説というよりも、むしろ下手な推理小説であるという印象を、わたくしは与えられる。

(c) ヴァスバンドウの『唯識』の核心

さて、わたくしは『大法輪』第5巻に寄稿した松田教授の「唯識の祖師たち」という、非常に優れた解説を引き合いに出して、「ヴァスバンドウとは誰か?」というテーマについて考えた。思想史研究において重要なことは、思想そのものを研究することだけでなく、その思想の担い手について十分に知ることである。ヴァスバンドウが一人いたか二人いたかという問いを完全に無視して、われわれは前へ進むことは出来ないのである。『大法輪』第5号に寄稿した松田教授の「唯識の祖師たち」を読んだついでに、わたくしは横山紘一氏「立教大学教授」の「唯識

とは何か」という論文を読んだ。横山教授は、唯識思想の研究において我國の第一人者と言われている仏教学者である。最近、仏教研究において注目されつつある竹村牧男氏〔筑波大学教授〕の「唯識から見た心と世界」という論文も、わたくしは通読した。横山教授も竹村教授も、唯識を「心」として理解しているように見える。全世界は自分の心が生み出したものである、あるいは全世界は心によって描かれているものである——恐らく、このように横山教授と竹村教授は、それぞれ、考えているように思われる。二人とも、「心」を唯識思想の根底にあるものと考えている。唯識研究において、一般に「唯識」は「心」として理解される。横山教授も、竹村教授も、学界の通説に従って、「心」を唯識思想のベースにしている。しかし、わたくし自身は、「心」とは何かということの問題にせざるを得ない。全世界は「心」によって生み出されたものであるというふうに考えれば、「心」は何かある実体的なものを意味するように理解されないであろうか？ あるいは、全世界は心によって描かれているというふうに言われれば、全世界は「心」の表象であると認められるのではなからうか？

ヴァスバンドウの「唯識」の体系を、わたくしは唯心論ないし観念論〔Idealism〕として理解しない。唯心論とは何か？ 人間の心から独立して外界は存在しないという哲学の立場が、それである。心だけが実在するというのが唯心論である。ヴァスバンドウの「唯識」は、「心〔citta〕あるいは意識〔vijñāna〕」として理解されるけれども、それは唯一の実在あるいは究極の実在ではない。現実には存在するのは心だけである——このようにヴァスバンドウは言っていない。唯識の体系において「唯識」〔cittamātra〕は「唯心」を意味するけれども、このように解釈することは誤解を招きやすい。サンスクリットのチッタ〔citta〕は、citta から派生された語である。チット〔citi〕は「知覚する」という意味の動詞であり、citta は cti の過去受動分詞である。それゆえに、citta は「知覚されてくる」

という意味であり、この過去受動分詞が名詞化して用いられれば、それは「知覚されていること」を意味する。チッタは「心」ではなく、むしろ「考えること」あるいは「考え」を意味する。それゆえに、「唯識」は「単なる考え」あるいは「意識のみ」として理解されるべきである。しかし、「意識のみ」は、決して唯一の実在あるいは変化することなく存続する心ではない。チッタマトラを、わたくしは「知覚のみ」というふうに理解している。「知覚のみ」は、外界から独立して存在し、外界を成立させる心ではない。ヨーロッパ哲学において最初に唯心論を説いた哲学者は、ジョージ・バークリである。バークリによれば、日常的な事物は観念あるいは感覚のコレクシオンである。外界の事物は、心によつて知覚された時のみ存在する。しかし、ヴァスバンドウの「唯心」あるいは「唯識」は、バークリのな「心」ではない。ヴァスバンドウによれば、実在としての心は存在しない。存在するのは「知覚のみ」である。「知覚のみ」が存在するというのは、実は、比喩的な表現である。チッタ、すなわち、「知覚のみ」は変化しない存在というよりも、むしろ瞬間的な意識の流れであり、それは「幻影」〔マヤー〕のようなものである。チッタは、存在ではなく、生成として理解されるべきである。ヴァスバンドウの唯識の哲学においては、外界の事物は、心によつて知覚された時のみ存在するのではない。外界は最初から存在しないのであり、それを知覚する何かあるもの、例えば、心も存在しない。外界は「知覚のみ」、あるいは「単なるアイデア」に過ぎない。そして、それを知覚する主体も存在しない。唯識の体系において見出しされるのは、知覚する主体としての心ではなく、「知覚のみ」〔唯識〕である。

われわれは、外界の存在を唯識から生じる、というふうに解釈すべきではない。この世における一切はそれ自体において存在しない。一切は唯識から生じる、それゆえに、唯識〔*cittamatra*〕が唯一の実在である——このよう

な唯識の体系の解釈を、わたくしは受け入れない。このような解釈は誤りである、と、わたくしは考える。世界は「唯識」〔「意識のみ」〕であるという陳述は、単に外界だけでなく、同時に内面の世界をも含むのである。チッタそのものも、実は、「知覚のみ」である。チッタ〔「知覚のみ」〕、あるいは唯識〔vijñāpimātra〕も決して実在しないのである。チッタないし唯識も、外界の事物あるいは外界そのものと同じく、幻影のようであり、実在ではないのである。外界も内界も、あるいは同じことだが、日常的な事物も心も、単なる知覚、単なるアイデア、単なる意識に過ぎない。この世における一切は心によって作られたものである、というふうに、わたくしは考えない。この世における一切は「知覚のみ」である。外界と内界は、等しく幻影のようである、いや、それらは夢である！しかし、「心」が夢を見させるのだ、われわれは、この夢から目覚めなければならない、と、唯識の体系において説かれているのであろうか？ このような解釈を否定するのが、わたくしの「唯識」理解の第一歩である。

「唯識」あるいは「心」は外界の事物を表象するのではない。なぜなら、外界の事物は存在しないからである。外界の事物は「知覚のみ」であり、それ以外の何ものでもない。心によって表象される世界という表現は、誤解を招くかも知れない。外界あるいは外界の事物は存在しないけれども、意識ないし心は現実存在する——このように人は考えるかも知れない。もしも、心が世界を表象するものであるとすれば、心は表象を生じさせるものである、あるいは心は夢を見させるものである。「知覚のみ」、あるいは「心」に目覚めることによって、人は解放されるに違いない——このように考える人が、どこかにいるかも知れない。しかし、唯識の体系は「唯識」から成り立つ超越的な実在、あるいは「真如」〔tathatā〕を説いているのではない。「唯識」あるいは「心」そのものが「知覚のみ」に過ぎないことを、唯識の体系は説いているのである。唯識の体系は「知覚のみ」あるいは「意識のみ」に

ついで語るだけであり、「知覚のみ」を超えて前へ進まない。「知覚のみ」は純粹精神でもなければ、現象のかなたに存在する純粹意識でもない。それは、外界の事物と同じよう幻影のようであり、夢なのだ！ ヴァスバンドゥによつて教えられる唯識は、われわれの妄想以外の何ものでもない。唯識という現象は、輪廻の中の出来事である。外界の世界も自己も存在しない。外界の事物も、自己あるいは主体も単なる比喩に過ぎない。日常生活において、われわれは夢を見ている。夢を見ていることは、実際には、目覚めている状態と同じである——このように唯識の体系は教える。しかしながら、唯識の体系において最も重要なことは、われわれが夢から目覚めることが出来るという洞察である。

このように「唯識」あるいは「心」を理解することによつて、われわれは唯識の体系を正しく理解出来るのではないかと、わたくしは考える。ヴァスバンドゥにおける「唯識」、あるいは「知覚のみ」という現象を夢の中の出来事として解釈すること——それが、わたくしのヴァスバンドゥ研究の一つの戦略である。一方において、わたくしはヴァスバンドゥの唯識の体系をイギリスの哲学者バークリの唯心論と比較することを危険であると見なす。他方において、「唯識」ないし「心」を、世界を成立させる、究極の实在として解釈することを、わたくしは否定せざるを得ない。

(d) ヴァスバンドゥの唯識の体系へのアプローチ

唯識あるいは心を正しく理解しさえすれば、ヴァスバンドゥの唯識の体系を理解することは、それほど難しくな

いであろう。ヴァスバンドウの唯識の体系を理解するために、わたくしは彼の三つの作品、すなわち、『唯識二十論』〔*Vimsatika*〕、『唯識三十頌』〔*Trimsika*〕および『三性論』〔*Trisvabhavanirveda*〕を検討したいと思う。『唯識二十論』のテーマは、唯識¹、ないし²心³である。『唯識二十論』は22のカーリカー（メモ用の詩句）から構成され、これらのカーリカーにはヴァスバンドウ自身の註釈が添えられている。『唯識二十論』は、ヴァスバンドウ対仮想の論敵の論争という形式の論文である。これに対して、『唯識三十頌』は、ヴァスバンドウ自身の唯識の体系のダイジェストである。この作品に対して、ステイラマティ（安慧）が詳細な註釈を書いている。我国の仏教界においては、『唯識二十論』と『唯識三十頌』は広く読まれ、特に『唯識三十頌』はヴァスバンドウの唯識の体系を知るために最も重要な作品として高く評価されている。わたくし自身も『唯識三十頌』あるいは『唯識二十論』を高く評価し、ヴァスバンドウの、この作品の再検討をすべきであると考えている。もしも、機会があれば、わたくしは『唯識三十頌』を検討して、短い論文を書きたい。『三性論』も、ヴァスバンドウの作品に帰せられる。この作品も思想的に重要である。

「わたくしの『唯識』——ヴァスバンドウの世界——」（神奈川大学『人文研究』第142集、二〇〇一年。1—26頁）というエッセイにおいて、わたくしは、『唯識二十論』と『唯識三十頌』を扱った。ヴァスバンドウの唯識の体系における、最も重要なキーワードの一つは、アーラヤ識〔*Alaya-vijnana*〕である。アーラヤ識は、いわば、メモリーとしての意識⁴である。このメモリー意識は一切の存在しているものの根底にある意識、貯蔵庫としての意識であると言われる。アーラヤ識には人間の経験が含まれ、その意識は、あらゆる精神的な現象の芽、あるいは種子であると見なされる。アーラヤ識は無意識、あるいは潜在意識というレベルの、心的作用として理解されて来たので

ある。そして、このアーラヤ識から、この世における一切は生じると考えられる。しかし、アーラヤ識から全世界は生じない。アーラヤ識は「知覚のみ」の変化したもの、すなわち、転変の一つに過ぎない。そして、「唯識」の三種類の变化〔識の転変〕は、もちろん、妄想である。三種類の識の転変の一つであるアーラヤ識から、この世における一切が生じるということは、あり得ない。われわれが知ることが出来るのは、結局、「意識のみ」、あるいは「知覚のみ」であって、外界の事物は存在しないのである。存在しない事物が、どうして唯識から生じるのであるか？ われわれの存在を含め、全世界は「知覚のみ」によつて組み立てられた夢あるいは「知覚のみ」の投影に他ならないのである。

アーラヤ識と並んで重要なのは、ヴァスバンドウの「三性説」〔*Trisvabhāva-vāda*〕である。『唯識三十頌』のカーリカー、20—25において、ヴァスバンドウは「三性」について論じている。三性の詳しい説明は、彼に帰せられる『三性論』に見い出される。『唯識三十頌』において、ヴァスバンドウは「三つの自性」についてスケッチしている。三つの自性とは、1. 妄想されているもの〔*parikalpita*〕、2. 他に依存しているもの〔*paratantra*〕、3. 成就されているもの〔*pariṣpanna*〕である。ヴァスバンドウは、「三つの自性」と言っているけれども、三つの自性と名づけられるものは、現実には「無自性」であり、自性（固有の性質）を欠いている。さて、横山教授は、「唯識とは何か」という論文（『第法輪』第5号、61—62頁）において、唯識思想の三性説に言及し、次のように言っている——

このように唯識思想は存在を三種に分け、そしてすべての存在を心に還元して、まずは「言葉で語られ

執着された存在」(遍計所執性)から脱却して「生の存在」(依多起性)に振り返り行き、その生の存在から汚れを次第に払拭して最後に「あるがままにある存在」(円成実性)に辿り着くことを目的とする実践的な教理であります。

唯識思想は、果たして、「最後に『あるがままにある存在』(円成実性)に辿り着くことを目的とする実践的な教理」であろうか？ あるがままにある存在とは、どういう存在なのであるか？ 横山教授は、*parinissanna*を「あるがままにある存在」と翻訳した。わたくしはこの語を「成就されているもの」と翻訳した。『唯識三十頌』25において、「タター『*tanhata*』という言葉が見い出される。横山教授は、ひよつとすると、タターを、*あるがままにある存在*」と翻訳するかも知れない。*あるがままにある存在*、という語によって、横山教授が何を意味したか——そのことは、彼のこの文章からは理解され得ない。それはともかく、パリニシパンナを究極の實在あるいは絶対者〔*das Absolute*〕として理解すれば、タターは超現象的な存在あるいは永遠に変化しない真実の存在として理解されるに違いない。わたくし自身はタターを「そのようであること」〔*真如*〕として理解する。妄想されている自性、および他に依存している自性と同様、成就されている自性も、実は無自性であって、自性〔固有の性質、みずからの存在〕を欠いている。結局、そのようであること、というのは、私見によれば、この世における一切の事物は、わたくし自身の生存も含めて、「知覚のみ」であるということの意味する。タターは、決して真実の存在、あるいは究極の實在を意味しない、と、わたくしは考える。外界の事物、および自己を、わたくしは「存在」としてではなく、むしろ「生成」ないし「生存」として理解したい。「成就されている自性」は、「妄想さ

れている自性”および“他に依存している自性”と同様に、“知覚のみ”によって投影された非存在であり、真に存在していないのである。一切は“知覚のみ”であるというのが、唯識思想の核心である。——このように、わたくしは考えている。そして、唯識に対応する指示対象は、どこにも見出し出されない。“知覚のみ”——それは幻影のようであり、夢に過ぎないのである。

(e) 参考文献について

わたくしは“唯識学者”ではない。もちろん、わたくしは、ヴァスバンドウの唯識思想を専攻する仏教学者でもない。わたくしは、インドおよびヨーロッパの思想史を専攻する、一介の研究者に過ぎない。たとい、わたくしがヴァスバンドウの唯識の体系を研究するとしても、わたくしの“研究”は、仏教学の領域における研究ではない。思想史の大枠において、わたくしはヴァスバンドウの唯識思想を哲学的に検討しようとするに過ぎない。参考文献についてもヴァスバンドウの唯識思想に関する内外の文献を、わたくしは網羅的に渉猟しようとは思わない。わたくしの関心は書誌学的なものでもなく文献学的なものでもない。わたくしは必要最小限の文献を読み、唯識思想を専攻する仏教学者から、ヴァスバンドウの唯識思想について学びたいのである。ただし、第一級の専門家の研究を参照することは不可欠であろう。

『唯識二十論』と『唯識三十頌』のテキストとして、わたくしはシルヴァン・レヴィによって編集されたものを使用することにした。レヴィのテキストは、一九二五年に出版された。これら二つのテキストの翻訳の中で、特に

わたくしが参照したのは、エーリヒ・フラウヴァルナーの *Die Philosophie des Buddhismus* [Berlin 1956]、およびステイファン・アナツカーの *Seven Marks of Vasubandhu* [Berkeley, 1984] に含まれている翻訳である。レヴィイのフランス語の翻訳（一九三二年）も参照されねばならないであろう。ヘルマン・ヤコービは『唯識三十頌』およびステイラマティの註釈をドイツ語に翻訳した（一九三二年）。ヤコービの独訳は非常に優れていると、わたくしは思う。幸いなことに、ヤコービはステイラマティの註釈をドイツ語に全訳している。ところで、現代日本語訳として、わたくしが手もとに置いて参照する一つは安田暎胤氏の『唯識三十頌』、『大法輪』第5号、88—94頁の現代語訳である。安田氏の『唯識三十頌』の現代訳がわたくしの手もとにあるので、わたくしはそれを読むのである。わたくしが青春時代に傾倒した一九世紀のドイツの偉大な法学者、ルードルフ・フォン・イエーリングの言葉をもじって言えば、金持ちでないわたくしには、^レわずかの文献で何とかやりくりする、^レという技法 [die Kunst] は死活問題である！ やりくりすること、および思考の経済が、わたくしの研究の二つの武器である。

わたくしの六疊一間の書齋にある唯識思想の研究書は、ほんのわずかである。アナツカーの『ヴァスバンドウの七つの作品』[*Seven Works of Vasubandhu*] のコピー、K・N・チャテルジーの『ヴァスバンドウのヴィジュニャプティ・マートラター・シッティ』[*Vasubandhu's Viṅcī-mātrātā-siddhi*, 1980]、フラウヴァルナーの『仏教の哲学』[*Die Philosophie des Buddhismus*]、レヴィイの『唯識の体系を研究するための資料』[*Matériaux pour l'étude du système Viṅcī-mātrātā*]、およびアケ・フキスト [Ake Bugist] の『三つの自性』[*Trisvabhāva*] である。H・W・シューマンの『大乘仏教』[*Mahayana-Buddhismus*, 1990]、イェンス・シュリーターの『仏教入門』[*Buddhismus zur Einführung*, 1997]、クノー・ロレンツの『インドの思想家たち』[*Indische Denker*, 1988]、およびポール・ウィ

リアムズ／アントニー・トライブの共著、『仏教思想』[*Buddhist Thought*, 2000]という四冊の仏教書が、わたくしの書齋にある。これらの書物において唯識思想が比較的詳しく論じられている。シューマンの著書を除き、他の三冊の書物において「唯識」は「ヨーガーチャラ」と呼ばれている。シューマンは唯識説に「ヴィジュニャーナヴァータ」という呼称を与えている。ウイリアムズ／トライブの『仏教思想』において論じられている「ヨーガーチャラ」は、四冊の書物の中でも、特に、わたくしの興味をそそる記述を含んでいる。

さて、わたくしは、ヴァスバンドウの唯識の体系を研究するための戦略を、この〈研究ノート〉において、このように大急ぎでメモしたのである。研究において重要なのは目的と方法である。目的が設定されれば、方法は容易に決定される。わたくしにとって必要なのは、方法論ではなくて「方法」である。そして、われわれの方法によって得られるのは、永遠に変化しない普遍的な真理ではない。われわれによって獲得されるのは、「仮説」、あるいは「作業仮説」である。単に書物や専門論文を読むだけでヴァスバンドウの唯識の体系が理解されるとは限らない。われわれは、ヴァスバンドウの唯識思想をめぐり、開放的で、しかも制限のないディスカッションをすべきである。唯識研究の伝統に基づき、サンスクリット、チベット語、あるいは漢文のテキスト／翻訳に頼るだけで、人は満足すべきではない。われわれは思想的に「唯識」を理解すべきである。

なぜ、われわれは研究のための「戦略」を必要とするのであろうか？ 戦争に勝つためには、「戦略」は不可欠

である。ヘラクレートスの言うように、「戦争は万物の父である」。しかし、われわれの戦争は敵を殺害することを目的とすべきではない。われわれの戦争は言論の戦争であるべきである。Opened discussions によって、わたしはヴァスバンドウの唯識思想を徹底的に解明したいと思う。